

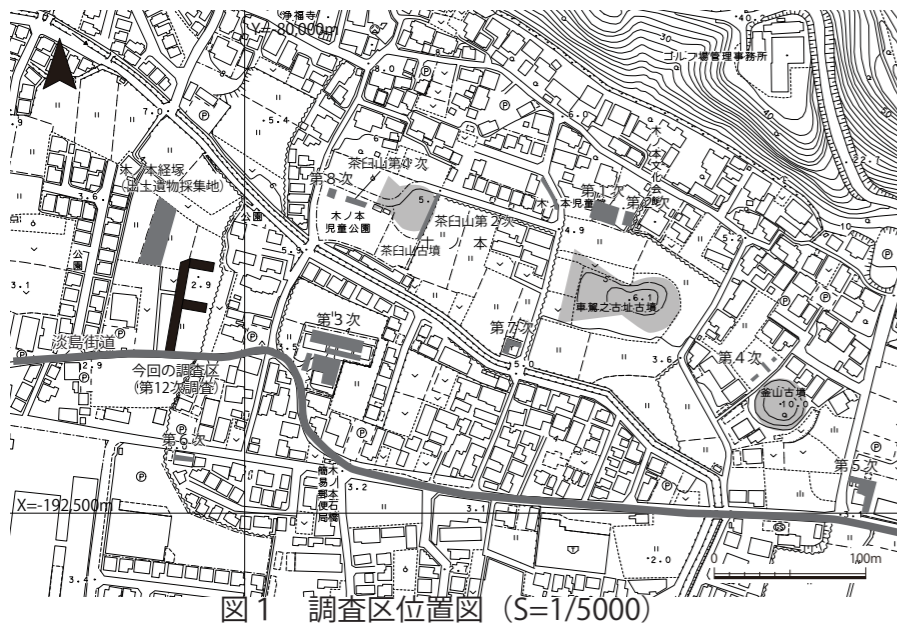
# 木ノ本Ⅲ遺跡第12次発掘調査現地説明会資料

和歌山市教育委員会  
公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団

調査所在地：和歌山市木ノ本 656-1 他  
 調査期間：平成 26 年 10 月 1 日～現在継続中  
 調査面積：527 m<sup>2</sup>  
 調査原因：分譲住宅建設に付帯する道路工事  
 主な時代：鎌倉時代  
 主な遺構：寺域を区画する溝、焼成土坑、井戸

木ノ本Ⅲ遺跡は、和泉山脈の南麓の東西に細く伸びる扇状地上に立地しています。南に傾斜する扇状地は、国土地理院の土地条件図では、海成による砂堆ないし、砂州に分類されています。縄文時代に堆積した砂により形成されていますが、車駕之古址古墳をはじめとする木ノ本古墳群が所在しており、安定した地盤であったといえます。周辺の調査では、井戸や集石遺構、石垣、礎石、溝等の中世遺構が多くみつかっています。調査区北西の水田には、木ノ本経塚が所在し、耕作中に須恵質壺と瓦質壺、和鏡が採集されています。

今回の調査地は、扇状地の先端の北西から南東へ低くなる傾斜地に位置します。南側は宅地化が進行し、分かりにくくなっていますが、調査地とは約0.6mの比高差がある低地が広がっています。古代の幹線道路である南海道の位置は、研究者により諸説ありますが、調査地のすぐ南側を通る近世の淡路街道も候補のひとつになっています。

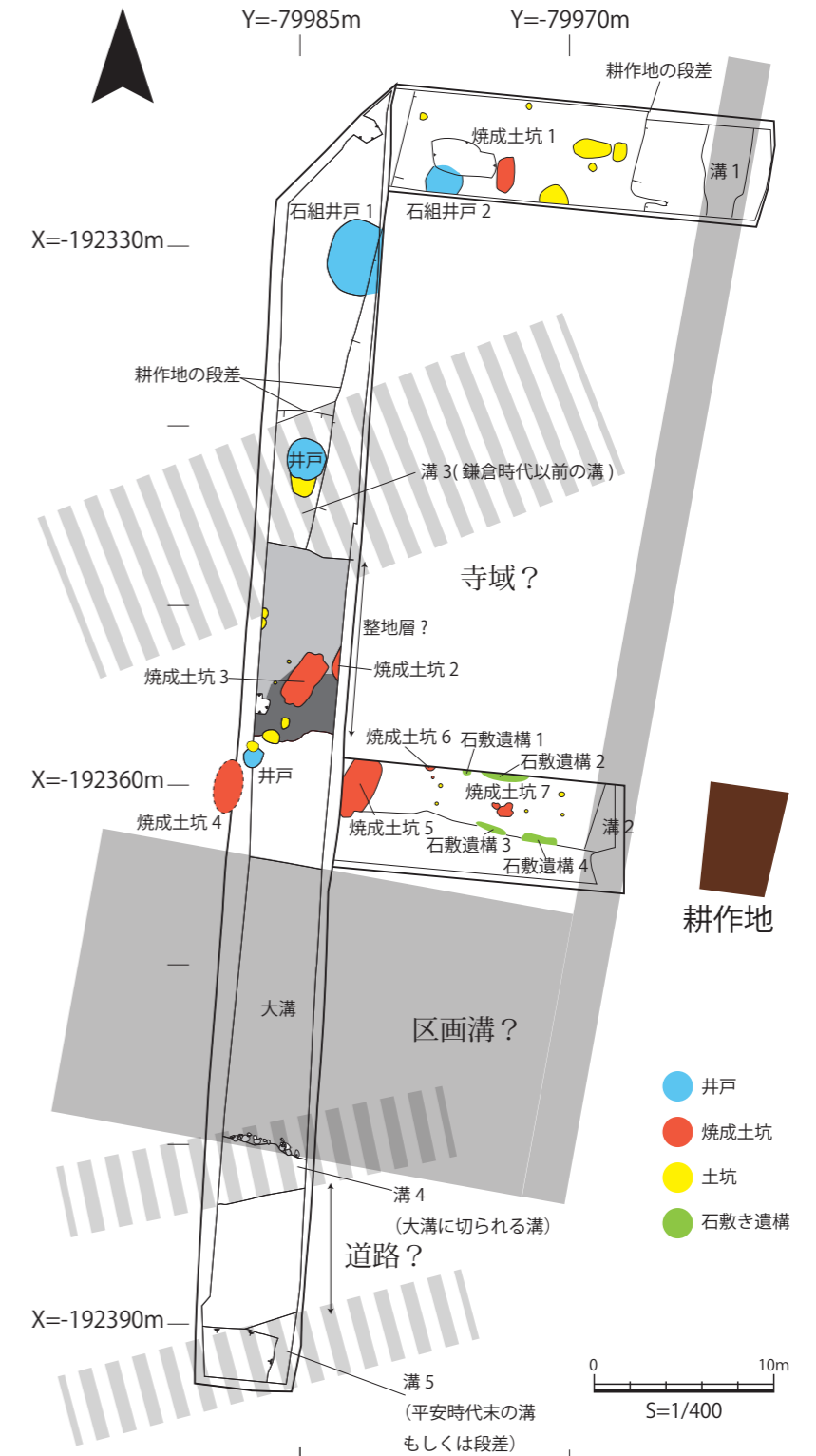
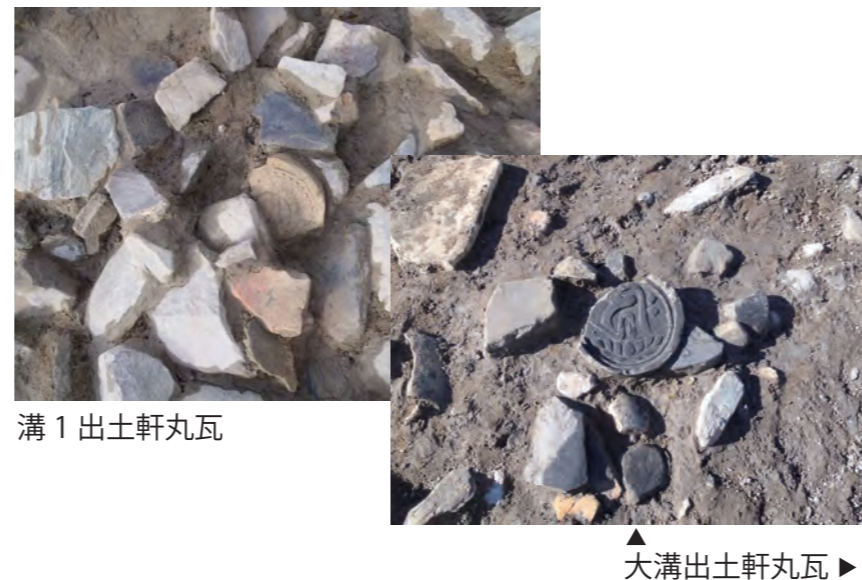


今回の調査では、調査区南側と東側で、古代末から鎌倉時代の瓦が多く廃棄された東西方向の大溝と南北方向の溝1・2を検出しました。これらの溝に区画された北西側では、井戸や焼成土坑を複数基確認し、遺構や包含層からも瓦が出土しています。

周辺の調査でも鎌倉時代の瓦が出土していることから調査区付近に寺院が存在したと推測されていましたが、今回の調査地では多量の瓦が出土し、古代末から鎌倉時代の寺院で用いられる梵字を施した軒丸瓦が含まれていることから、大溝と溝1・2に区画された北西側は寺域内にあたり、井戸や焼成土坑が複数みつかることから、寺院に付属する工房であったことが明らかになりました。

このほか、寺院に関連する遺構より古い時期の3条の溝(溝3・4・5)を検出しました。これら平行する3条の溝は、鎌倉時代の大溝とは異なる南西-北東方向に流れていました。寺院廃絶後の耕作溝の方向や現行地割は、寺院を区画する溝と同じ方向で、寺院建立の前後では地割が大きく変更されていることから、確認した寺院がこの地の水田開発に関わっている可能性があります。

最後に、溝4と溝5の間は、幅約7mの空間地となっています。鎌倉時代にはすぐ北側に寺院があり、推定南海道や淡路街道に隣接していることや、南側が低地となる扇状地の先端に立地していることから、平行する2本の溝に挟まれた空間地は、道路である可能性を考えています。しかし、道路と断定するには、通行痕跡や路面の硬化を検出する必要がありますが、今回は検出できていません。道路と認定するには、継続的な調査と道路の可能性を考えての調査が必要であり、今回の調査では可能性を指摘し、今後の南海道の調査につなげていきたいと考えています。



耕作地

- 井戸
- 焼成土坑
- 土坑
- 石敷遺構